

プロ野球 元助っ人選手を取材して

高野 勲

日刊の高野です。

現在は大阪本社編集局野球部でプロ野球データ記事を執筆。

それまではおよそ4年にわたり、プロ野球取材の現場にも。

とりわけ外国人選手の取材には興味をもってたずさわってまいりました。

プロ野球初観戦は1974年（昭49）8月14日、平和台球場での太平洋—日本ハム戦。延長戦の末に日本ハム1—0で勝ちました。弊社の過去記事検索によりますと、外国人投手のケキッチがなんと代打で登場し、決勝タイムリーを放っていました。何かの暗示のようだと近年に入り思いました。

高校時代のある日、愛読していた「週刊ベースボール」に連載してあった、常盤新平様の「ベースボール・グラフィティ」に、ある本の紹介がありました。

「ハロー、スタンカ、元気かい」という本で、かつての助っ人選手の消息を追うという内容でした。

著者の池井優先生は、横浜から会場にお見えでした。

この本が私の人生を変えました。

1978年当時、文藝春秋におられた花田紀凱編集長。現在は月刊 Hanada 編集長でいらっしゃいます日本を代表する名編集者ですが、後にロス疑惑をすっば抜いた、立志伝中の人物です。

この方が池井先生に

「引退した元助っ人選手がどうしているか、追ってくれないか」と依頼なさいました。そこで池井先生の取材が始まったのです。

インターネットなど影も形もない時代です。

池井先生の、アナログ極まりない作業が始まりました。

元助っ人に手紙を書き、返事を待って取材の段取りをつけるのです。

南海のスタンカ、広島のリッツ元監督、ホプキンス、巨人ジョンソンといった選手からはすぐに返事が届き、約束を取り付けることができたそうです。

阪神の名投手バッキーは、外国人初の沢村賞投手です。帰国し、小学校教師のかたわら「ハ

ンシンタイガースノオカネ」で牧場を経営。

阪神に在籍したラインバックは、地図で「Hanshin」という街を探したが当然見つかりません。一体どんな田舎の球団だろうとショックを受けました。

そして何より心を揺さぶるのが、南海の名投手スタンカの物語です。昭和40年秋、彼は神戸の自宅で、浴室のガス事故により息子を亡くします。外国人墓地に葬られる際に、奥様は悲しみのあまり失神します。スタンカは彼女を抱きかかえ、木枯らしの舞う山を降ります。池井先生は原稿用紙を涙で濡らしながら、執筆されたと聞いております。

なおスタンカさんは翌年昭和41年9月27日、外国人投手初の通算100勝を達成します。この日は私の生年月日であることも申し伝えます。

本に挟んであった読者カードに感想を書き、40円切手（当時）を貼って投函しました。数週間後に、万年筆で達筆な文字の書かれた、一枚のはがきが！ 何と著者の池井教授からでした。

「君のような熱心な読者がいると著者として、こんな嬉しいことはありません。続編を出して欲しいという声が多く読者から寄せられています。出来れば夏休みを利用してまた取材の旅に出たいと思っています」

このはがきは現在も、私の手元にあります。

大人になったらスポーツ新聞の記者になり、外国人選手の取材をしたいと思い、試合を見ても何となく外国人選手を目で追うようになっていました。

そして昭和63年の秋。日刊スポーツ大阪本社の入社試験に臨んだ私は「残りの学生生活で何をしたい」と聞かれ「お金さえあれば、引退した元プロ野球外国人選手を取材してみたい」と答えました。もっともお金がなく、実現はいたしませんでしたが。

なんとか内定を勝ち取った私は、平成元年4月、念願かなってプロ野球担当記者としてデビューすることができました。

実際に取材の現場に出たのは2度です。

1989年（平元）～1990年（平2）

オリックス・ブレーブス

阪神タイガースでした。

1999年（平11）～2001年（平13）

このときは、野村監督を迎えた阪神の取材がメインでした。

ではここで、実際に私が接した主な外国人についてお話しして参りましょう。

◆バース

ご存じ史上最強の助っ人。

担当記者として接したことはありませんが、OB戦で来日した際に甲子園であいさつしました。

なんとも知的な方で、とても分かりやすい英語を使う方です。

確か新庄選手がメジャー行きを決断する直前。

「残って阪神でやってくれ」というコメントを引き出しました。

◆バッキー

池井先生の名著「ハロー」でも詳しくふれられています。

99年に始球式のために甲子園に来られることを前日から知っていた私は、座右の書「ハロー」を持って行きました。

関係者入口に外国人の女性が一人で立っているのを見て、バッキー夫人だとピンとききました。

そこで本を開いて名前を確認し

「You must be Doris!」

と話しかけました。

驚きのあまり、大きく見開いた老眼鏡越しの目は、今も忘れることはできません。

そのドリス夫人も、近年になくなりました。

バッキーさんご本人も体調がすぐれず、飛行機での長時間の移動が難しいようです。

それでも「また日本に行きたい。吉田義男さんや小山正明さんと会いたい。それが人生最後の、そして最大の願いだ」

とおっしゃっています。

なんとか実現してほしいものだと思っています。

本日はこの催しにメッセージが届いておりますのでお伝えいたします。

「高野さん

とりわけ野球ファンから便りがあるのはうれしいものです。まず何より、わが親友の池井先生によくお伝えください。彼の本は今も持っております。彼はとても賢い方で、一生忘れることはできません。

あなたの聴衆に、私の結婚生活最良の時間は日本にいた1962年（昭37）から1969年（昭44）までの間だったとお伝えください。

野球に関していえば、阪神ファンという世界一のファンを持つことができました。そして巨人を相手に投げられたこと、そして巨人を相手にノーヒットノーランを達成できたことは一生の思い出です。巨人は全く特別な球団で、王さん、長嶋さん、金田さん、柴田さん、そしてほかの皆さんです。

もし私の体調がもう少しよければ、素晴らしいチームメートたちとまた甲子園に行きたい。それがわが人生最大の望みです」

以上です。

◆ブーマー

平成元年に記者として担当。

その際にイチローの思い出。

「ダイエー時代に神戸の球場を借りてトレーニングしていた。グラウンドを走っていたら、あまりのバットコントロールうまい打者を見つけた。イチローだった。あまりにうまくて走るのをやめてしまった」

「そこでオリックス首脳に、よかったな、次のスーパースターが出てきたな」と祝福したそうです。

◆コルボーン

日本人メジャー選手で、彼を知らなかったらモグリです。

平成2年にオリックスの投手コーチに。

家じゅうに「壁」「冷蔵庫」など、日本語の単語を紙に書いて張り付けるという学習法で日本語をマスターしました。

のちにマリナーズの環太平洋地区スカウトとなり、イチローの獲得に尽力。ポスティングで落札が決まったときのうれしそうなお声は忘れられません。

帰国後はドジャースの投手コーチとなり、野茂を指導。

阪神で活躍するウィリアムスに、あの投げ方を教えたのが彼です。

パイレーツでは桑田真澄投手も指導。

その後はレンジャーズのスカウトになり、ダルビッシュの獲得にも携わりました。

「日本人で短期間に英語が上達した日本人は2人。1人は元オリックスでメジャーリーガーにもなった長谷川滋利で、もう一人はいさおさん」との言葉は忘れられません。

◆ジョンソン

99年に現場復帰した際に、ホームランを連発し

「平成のバース」

の異名をとりました。

ユニホームを着た中で、最も仲のいいのが彼です。

退団後は阪神のユニホームを送ってくれました。それがこちらです。

子供のころから王選手のファンで、少年野球では一本足打法を試していたそうです。

ロバート・ホワイトティング氏の名著で、日米の野球文化を比較した「和をもって日本となす」を読み、自ら来日を熱望して阪神へと来ました。

2012年オフに「あの人は今」ならぬ「あの猛虎は今」という企画が始まり、取材できる元助っ人の心当たりを問われた私は迷わず彼の名前を挙げました。

現在はウオール街の「ウィーデン・アンド・カンパニー」という会社で取締役として活躍という、異色の転身を遂げました。

それがこちらの写真です。

「スポーツの世界も金融の世界も、激しい競争の世界であることは変わらない」

そして取材の終わりに

「ぜひまた日本に来てほしい」

というと

「阪神の4番としてかい？ 喜んで行くよ」

太平洋をはさみ、受話器越しに大笑いとなりました。

◆メイ

阪神と巨人という人気球団の両方に在籍した、実は初の外国人。

阪神に行く前は「日本に行くのは引退間際」と思っていた。でもこれからは若い選手を取りたいといわれ、日本へ。

阪神では野村監督を批判するピラをまいて退団するという、前代未聞の騒動を起こしました。

「野村監督は、私が彼に対して払っている敬意を私には払わない」

という批判文の文面を和訳したのは私です。

現在は日本球界の駐米スカウト就任を目指し勉強中です。

ロゼッタストーンという教材を買ってきたそうですが、残念ながら普段聞いていた日本語とは違うとぼやいていました。

◆ウィリアムス

03、05年阪神優勝の立役者です。

来日前には近鉄も獲得を狙っていました。

阪神担当から02年秋に「阪神が抑え投手を探している。誰か分からんか」と聞かれたので、

彼の名前を伝えました。

タッチの差でスポニチに先に書かれたのは、今でも痛恨の極みです。

来日前から知っている選手に日本で会うのは、また格別です。

京セラドーム大阪の通路で会ったときに

「若いころは、先発完投を目指していた。でもコルボーンコーチに、お前の体の使い方は横からの方が向いている」

と言われ、この投げ方にしたとのことでした。

コルボーンと長年の付き合いがあったため、感無量でした。

◆コリンス監督

彼の監督就任を完全スクープすることができました。

2006年の話です。なぜか掲載日はまた、9月27日付でした。

オリックス担当記者に頼まれ、情報を入手。

たぶん、オリックスの宮内オーナー、球団社長、そして私だけだったと思われま

実際に球場で会ったときに、私たちの新聞があなたの就任をすっぱ抜いたと伝えま

「How did you find it?」

と聞かれたので、のど元まで「ああして、こうして」と出かかりましたが、適当にごまかしておきました。

◆ストローター

この選手をご存じの方は、相当な阪神ファンでしょう。

1983年（昭58）に、バースとともに阪神入団。同じ左の強打者でした。

5月には6試合連続で先発3番打者。

バースを先発クリーンアップから追いやったのは、後にも先にも彼だけです。

28試合で5本塁打とまずまずの成績でしたが、自打球を左足に当て骨折。

オルセン投手を獲得した方針のため、解雇されました。

この怪我さえなければ、あるいはバースが退団していたかもしれません。

すると、阪神の、いや球界の歴史は一変していた可能性があります。

帰国後は犯罪に手を染めた少年のカウンセラーという、これまた異色の転身を果たします。

バースが残り自分が去ったことに関しては

「彼は三冠王に、球団は日本一になったじゃないか。

阪神は賢明な判断をしたと思うよ。誰に対しても悪い感情は持っていない」

と爽やかに語ってくれました。

残念ながら今月6日、お亡くなりになりました。享年65歳でした。

幻の最強助っ人として、どうか心にとどめ置きください。

◆親日

来日する外国人選手は「ほとんどが」親日家になります。

- ・車一台通らない大通りで、大勢の通行人が赤信号を守って、青に変わるのを待つ。
- ・地震に驚いてレストランから逃げ出した食事客が、翌日わざわざお金を払いに戻ってくる。
- ・津波で流された金庫が続々と警察に届けられ、その処理のために臨時職員が雇われる。

こういった日本国民の美徳が、助っ人選手の心を深く魅了します。

◆グラウンドで

私が英語で取材すると、おおむね歓迎されました。

助っ人選手の置かれた特殊な事情があると思います。

普通のビジネスマンが来日したのであれば、取引先や日本側のカウンターパートがある程度は英語で意思の疎通を図ることができます。

ところが助っ人選手は、仕事仲間と言語によるコミュニケーションがほぼ期待できません。外国人仲間、通訳、そして家族以外と話ができないという状況です。

そこにひょこっと英語を話す私が現れて、話を聞いてくれる。

おかげで通訳の方からも「高野さんが来ると助っ人が喜ぶ」と言われ、とてもうれしくなりました。

◆電話取材

現在は主に、阪神担当記者の要請を受け、来日前の選手を取材。

メジャー選手会に電話して代理人を探し、本人の連絡先を聞きます。

取材の際のポイントは「季語」。

09年オフに来日が決まった、阪神のメッセンジャーには、同じ時期に帰国した城島捕手に引っ掛けて

「彼のサインには首を振りません」

という記事に仕立てました。

◆月刊 Hanada

過去に私が書いた記事を花田編集長にお届けしたところ、なんと！ 月刊 Hanada に執筆依頼を受けました。お手元にあるのがそのコピーです。

ちなみに昨夏に飛鳥新社に初めて伺い、池井先生も交えて会食がありました。まさに談論風発の楽しい会でしたが、ひとつ残念なことが。

高校生のころから知りたかった

「どういういきさつで、元助っ人を取材しようという話に」

という疑問をお二人にぶつけたところ、そろって

「覚えていない」

とのことで、大変に興ざめでありました。

◆まとめ

近年はネットが普及し、一面識もない新旧の助っ人選手たちと簡単に連絡がつくようになりました。

就職試験で口にした「お金があれば、助っ人選手と話したい」という夢は、通話機能のおかげで無料でかなう時代であります。

現役バリバリの外国人も、いずれは一人残らず「元助っ人」となります。

彼らが国へ帰った後で、日本球界の思い出話を聞き、ファンに近況をお伝えする立場を務められれば、と思いながら、今季の開幕を楽しみに待っております。